日本宗教学会第 78 回学術大会で発表

堀内みどり

標記大会が、9 月 13 ～ 15 日にわたり、帝京科学大学（千住キャンパス）を会場に開催された。13 日午後に行われた公開シンポジウムは「宗教と科学の新たな世界」をテーマに、石黒浩・大阪大学大学院基礎工学研究科教授が基調講演を行った。石黒教授は、社会で活動するロボットの実現を目指し、知的システムの基礎的な研究を行い、インタラクションという日常活動型ロボットにおける課題を先駆的に提案。講演では、自らが関わって作成してきたヒューマノイドやアンドロイド、ジェミノイドなどを多くの映像で紹介しながら、それらの特長と今後の課題・方向性などについて述べた。これに対し、木村武史・筑波大学大学院教授と冲永宣司・帝京大学教授が、それぞれの立場からの意見を述べた。

14 日・15 日は、パネル発表と個人発表が 13 の部会に分かれて行われた。天理大学からの発表は以下の通り（発表順）。

澤井治郎：『ニューヨークタイムズ』にみるニーバーとグラハムの位置

岡田正彦：パネル「近代における暦・国家・宗教」（代表・司会）国民の祝祭日と仏教の忌日―『仏暦一斑』と『神宮暦』―

堀内みどり：夫婦再考―天理教の教えと「性」の多様性―

澤井真：パネル「イスラーム中世における神認識」（代表・司会）ジーリーの存在に自己顕現論におけるムハンマドとアダム

澤井義次：パネル「宗教研究における井筒『東洋哲学』とその展開（代表・司会）井筒俊彦の哲学的意味論とシャンカラの哲学

第 325 回研究報告会（9 月 18 日）
20 世紀における北太平洋地域のスピリチュアル・セラピーとしてのレイキ

ジャスティン・スタイン
（日本学術振興会海外特別研究員・佛教大学）

9 月の研究報告会において、「レイキ」あるいは、「臼井霊気療法」と呼ばれるスピリチュアル・セラピーの展開について研究報告した。本発表の内容は、『近現代民間精神療法』（国書刊行会、2019 年）のなかで発表者が分担執筆した内容に基づいている。

発表では日米の文化交流を考察しながら、レイキの発展が北太平洋地域という「インターシステム」でつくられたものであることを明らかにした。すなわち、北米地域からの影響を受けて日本において誕生した霊気療法は、この意味で、日本（東洋）と米国（西洋）を個別にではなく、一体として捉えることではじめて理解が可能となる。

レイキを創造するために、創始者である臼井甕男（みかお）（1865 ～ 1926）は、大正時代において密教や米国のメスメリズムやニューソートの実践を組み合わせた。その後、昭和初期に臼井の弟子である林忠次郎（1880 ～ 1940）が、科学的な言説や人体の解剖学的な知識を取り入れた。さらに林の弟子で、ハワイ生まれの高田ハワヨ（1900 ～ 1980）は、二世日系アメリカ人であったが、1930 年代後半から 1970 年代に、臼井霊気療法をハワイや北米に適応させることを試みた。上述したように、レイキの適応は西洋化を通して展開されたが、その一方で、アメリカ人に「日本文化」の要素を翻訳するべく、高田は新たな実践を取り入れた。そのため、アメリカにおいて、レイキを日本化したと言うことができる。したがって、日本においてもアメリカにおいても、レイキとは日米の複合物であり、その文化圏は国境によって別個に分離できるものではない。

質疑応答では、「インターシステム」論や、1970 年前後に拡がったヒッピーとの影響関係、レイキの霊授という伝授式の受け方、さらに遠隔療法などについての質疑応答があった。

「東アジア人文社会科学研究の新地平」シンポジウムに参加

金子　昭

標記国際学術シンポジウムが 10 月 4 日・5 日の 2 日間、台湾台北市の中国文化大学にて開催された。これは同大学に東アジア人文社会科学研究院（東亞人文社會科學研究院）が開設されるにあたり、その開設式典に合わせ、徐興慶学長の肝煎りで開催された大規模シンポジウムであった。

総合テーマ「東アジア人文社会学研究の新地平―人物・文化・思想・海洋・経済の合流―」の下、初日は開設式典に引き続き、基調講演も含めて 16 の研究発表、2 日目は 2 会場に分かれて合わせて 24 の研究発表が行われた。台湾、中国、日本、韓国、ベトナム、アメリカのさまざまな分野の研究者により、東アジアについての人文社会学の諸研究の新しい総合と展開を目指すという野心的な試みで、使用言語も中国語、日本語、韓国語、英語で行われ、それぞれの発表にコメンテータがつくという充実した内容のものだった。

私は、2 日目午前の「近現代東アジアの政治と秩序」のセッションで、「東アジアにおける平和共同体の可能性と宗教の役割―海洋という観点からみた東アジアの宗教的平和論―」という題目で発表。コメンテータは東アジア宗教社会科学研究院の副執行長を務める林孟蓉副教授が担当した。

EU と異なり、その構築が困難とされるのが東アジア共同体である。しかし、東アジア諸国を取り巻く海洋に着目して、これを現実の海のことだけでなくメタファーとしても捉えたときに、新たな観点が見えてくる。東アジアの宗教文化には、（1）宗教間対話や宗教間交流を通じて行われる、平和と和解を求める海流、また（2）グローバルに展開されるヒューマニスティックなボランティア活動の海流が流れている。私はその事例として、どちらも大乗仏教の流れを汲む日本の立正佼成会と台湾の慈済基金会を取り上げ、両者がそれぞれの仕方で東アジアの平和共同体構築のために寄与する二大海流となっていることを報告した。